死者への歌・死者からの歌
—『万葉集』『文選』の挽歌の作中主体—

井上さやか

1　はじめに

「挽歌」とは『万葉集』において用いられた歌の分類名である。「雑歌」「相聞」と並ぶ、いわゆる三大部立のひとつとされる。したがって万葉集研究の主たるテーマのひとつとして、これまでにも膨大な研究の蓄積があり、今なお個々の作品などに細分化され深められつつあるテーマであるといえる。そうしたなかあえて本研究所が今回の共同研究のテーマとして取り上げたのは、他分野の研究者を交えた本共同研究において新しい視点や問題点の掘り起こしを期してのことであった。『万葉集』の「挽歌」が日本文学研究者以外の目にどのように映るのか、ということ自体が興味深くもあった。

万葉集中でこの分類を掲げているのは、巻2・巻3・巻7・巻9・巻13・巻14であるが、さらにほかの死に関わる歌全般を含めて挽歌とみなされ論究されてきた。そして、『古事記』『日本書紀』も含めて、原初的な死を悼む歌から宮廷挽歌へ、そして個人的な哀傷歌へ、という挽歌史が提示[1]されて以降、『万葉集』だけにとどまらない古代の挽歌史観が形づくられてきたといってよい[2]。

本共同研究は、まずそうした前提を問い直すことからはじめられた。そもそも「挽歌」とは日本古典文学においては『万葉集』でしか用いられていない。なぜそのような現象がみられるのか。そして「挽歌」とは何だったのか。また、万葉集以外の上代文献、たとえば『古事記』における「御葬歌」との関係をどう考えるか。こうした諸問題を含めて、他分野の研究者とともに検討していくこととなった。

そのような共同研究の場において筆者に課せられたことは、まず第一に万葉集中の「挽歌」について基礎的な資料を提供すること、第二に日本文学研究の立場から個別の問題を提起し論じることであった。そこで筆者はまず、『万葉集』における「挽歌」とはどのような性格を有するのかという視点から、基礎的な資料を提示した。その上で各共同研究員によって個別の問題意識に基づく論が展開された。本稿でも基礎的な資料を参考として掲げ、筆者なりの問題意識による小考を加えることにする。具体的には、『文選』の「挽歌詩」と『万葉集』の「挽歌」における歌の表現における主体の相違を軸にして、『万葉集』における「挽歌」の古代東アジアにおける文化的位置付けを試みる。共同研究での席上ではこうした問題点が明確にできなかったという反省があるが、ここではそこから派生した考えも含めて述べておきたい。

2　「挽歌」と挽歌史観

まずは万葉集における「挽歌」について基礎的な事項を確認しておきたい。

伊藤博氏によれば、万葉集における「挽歌」とは、分類名を掲げている巻2（94首）・巻3（69首）・巻7（13首）・巻9（17首）・巻13（24首）・巻14（1首）の計218首の歌々に加え、巻15（11首）・巻17（3首）・巻19（7首）をも含んだ「２３９首」であるという[3]。また、『上代文学研究事典』の「挽歌」の項目（尾崎富義氏担当）では、「２６７首（長歌５４首、短歌２１３首）」とされている[4]。いずれも部立を設けていない巻の歌をも「挽歌」とみなしており、それぞれで歌数が異なるように、何を「挽歌」と捉えるかは論者によって異なっている。たとえば伊藤説では、遙かに弟の喪を聞いて詠んだとある大伴家持の歌（17-3957～3959）や高橋虫麻呂の菟原処女の歌に和した同じく家持による歌

(19-4211・4212) などをも挽歌とみなしている。親族の死や伝説上の女性の墓を主題とした歌であり、内容からの判断であることが窺われる。一方、尾崎説では詳細が提示されていないのでどのような歌が「挽歌」とみなされているのか判然としないが、少なくとも伊藤説以上の歌数を唱えていることから、枠をさらに広げて死に関わる内容の歌を「挽歌」としていることが想像できる。

しかし、こうした歌々のすべてをはじめから「挽歌」とみなして議論をはじめてよいかは疑問である。なぜならば、万葉集において「挽歌」と明示されていない以上、そこに現代的な価値判断を含むことを避けられないからである。

同様の見解は青木生子氏も述べるところである。しかし氏は「挽歌」という部立てにある歌以外を「挽歌」として検出することを避ける一方で、『古事記』のヤマトタケル崩去前後の歌謡などを「挽歌的なもの」と呼び、万葉挽歌の源流として位置付けている。(5)

学術タームとしての有用性は認めるものの、「挽歌」という分類名がこれ以降の古典文献にも見出せないことを考えれば、まずは『万葉集』のなかでの限定された概念として捉えることから出発しておきたい。

そこで、基礎的な資料として、あくまで万葉集中に「挽歌」と明示された歌に限り掲出した。それらは明示のされ方によって、①類題に「挽歌」とある場合、②歌の題詞に「挽歌」とある場合、③左注に「挽歌」とある場合、の３タイプに分けられる。以下にその巻番号・歌番号と歌数を掲げておく。なお、研究会の席上では該当箇所の本文をすべて掲出して基本資料としたが、本稿では歌番号の提示にとどめ、小考に関係する箇所のみ本文を掲げることとする。

【資料１】

①類題に「挽歌」とある場合（6例218首）

巻2　141～234（94首）

巻3　415～483（69首）

巻7　1404～1417（13首）

巻9　1795～1811（17首）

巻13　3324～3347（24首）

巻14　3577（1首）

②歌の題詞に「挽歌」とある場合（3例11首）

巻5　794～799「日本挽歌一首」

巻15　3625・3626「古挽歌一首并短歌」

巻19　4214～4216「挽歌一首并短歌」

③左注に「挽歌」とある場合（3例9首）

巻15　3688～3690「右三首挽歌」

3691～3693「右三首葛井連子老作挽歌」

3694～3696「右三首六鯖作挽歌」

以上が、万葉集において何らかのかたちで「挽歌」と明示されている歌である。①～③をあわせて２３８首ある。ただし、①は各巻の編纂者かそれに準じる者のある時点での分類意識の反映であり、②③は①と同様または歌の作者か筆録者の考える作品個々の性格に帰するといえるだろう。つまり、『万葉集』の成立事情の複雑さから言って当然のことではあるが、「挽歌」と明示されている歌であっても、その提示の仕方とそこから窺える分類意識とは、ともに均質とはいえないということをまず確認しておきたい。

次に「挽歌」が部立名として成立した要因は、『文選』の「挽歌」という分類名の影響であると考えられている。ただし、中国文学においてはその名のとおり柩を挽く際の歌を指すのであるが、『万葉集』の場合は柩を挽く際の歌とは言い難い内容ばかりである。一方で『文選』には死者を悼む「哀傷」という分類名もあって、『古今和歌集』などではこの分類名の方が用いられている。ではなぜ『万葉集』においてのみ「挽歌」が選択されたのか。今となっては不明であるが、次のような見解もある。

> 死をめぐるうたが文芸の歴史の舞台にすがたをあらわした初期の時代から、つぎの柿本人麻呂による殯宮挽歌の達成の時期にかけて、そうしたうたは喪葬の儀礼をかたちづくる重要な構成要素として、本質的には抒情詩でありつつ、集団性・儀礼性をいちじるしくつよめていった。このようなうたの性格をいいあらわすには、抒情的側面にむすびつきやすい「哀傷」よりも葬儀のうたとしての「挽歌」の語のほうがはるかにふさわしい、というふうに万葉人がかんがえたであろうことは、容易に想像できるのではないか。そしてそのような「挽歌」の語が、和歌というジャンルが抒情詩として純化・固定していった王朝期には廃滅してしまった理由もそこにあったとかんがえられるのだ。[6]

しかし、このような見解の根底には、『万葉集』以外の例も含めた「死をめぐる歌」が直線的に並べられ、葬送儀礼に関わり、時間が移るにつれて発展したことを想定する挽歌史観があると思われる。

挽歌史観は、はやくに折口信夫によって提示された。[7] 挽歌は死者への寿詞詞章ともいうべき「誄詞」から派生したもので、人麻呂はこれらと関わりの深い遊部か、吉言部の出身であろうという説を唱えた。「誄詞」とは『文選』にもみられる死者を悼み送る詩であり、『日本書紀』によれば古代大和においても死の儀礼に際して「誄」が献上されたとある。そうしたことを踏まえて、従来から『万葉集』のことに日並皇子挽歌の研究において、神話的な叙述を含む儀礼的な性格を持つという点でそれ以前の挽歌との質的な差異が指摘され、そこに「誄詞」からの影響が指摘されている。[8]

また、『古事記』では、「誄」については記載がないものの、「御葬」「大御葬」の際の歌が記されている。

> 是に倭に坐す后等及御子等、諸下り到りて、御陵を作り、即ち其地の那豆岐田［那より下の三字は音を以ゐよ。］に匍匐ひ廻りて、哭為して歌曰ひたまひしく、
>
> なづきの田の　稲幹(いながら)に　稲幹に　匍ひ廻(もとほ)ろふ　野老蔓(ところづら)
>
> とうたひたまひき。是に八尋白智鳥に化りて、天に翔りて浜に向きて飛び行でましき。［智の字は音を以ゐよ。］爾に其の后及御子等、其の小竹の苅杙に、足跭り破れども、其の痛きを忘れて哭きて追ひたまひき。此の時に歌曰ひたまひしく、
>
> 浅小竹原(あさじのはら)　腰なづむ　空は行かず　足よ行くな
>
> とうたひたまひき。又其の海塩に入りて、那豆美［此の三字は音を以ゐよ。］行きましし時に、歌曰ひたまひしく、
>
> 海處(うみが)行けば　腰なづむ　大河原(おほかはら)の　植ゑ草(うぐさ)　海處はいさよふ
>
> とうたひたまひき。又飛びて其の礒に居たまひし時に、歌曰ひたまひしく、
>
> 濱つ千鳥(ちとり)　濱よは行かず　磯傳(いそづた)ふ
>
> 是の四歌(ようた)は、皆其の御葬(みはふり)に歌ひき。故、今に至るまで其の歌は、天皇の大御葬(おおみはふり)に歌ふなり。
>
> （『古事記』中巻・景行天皇条）

これら四首の内容は直接に死を表現してはいないが、破線部にあるように「御葬」にうたう歌として記されている。さらに波線部では、それらを天皇の「大御葬」にうたうと位置づけられている。こ

うした記述から、従来は『万葉集』における天智天皇・天武天皇の殯宮挽歌群と結びつけて考えられてきたのである。

しかし近年では、そのような『日本書紀』や『古事記』と『万葉集』といったそれぞれ異なる目的・表現形態を持つ書物間での記載情報を、にわかに結びつけることは疑問視されるようになってきている。

また、上野誠氏は先掲の日並皇子挽歌と「誄詞」の関係について次のようにも指摘する[9]。（傍点も同氏による）

> しかしながら、その想定が正しいとして、なぜ〈誄詞〉の受容が日並皇子挽歌に至って達成されたのかという、次なる問いが浮上してくる。というのは、〈誄詞〉とは殯宮における儀礼詞章であって、挽歌とは別のものであり、しかも挽歌が殯宮において歌われたという記録もないからである。

つまり「挽歌」と「誄詞」や殯宮や葬送儀礼などとを混同すべきではないという指摘であろうと思われ、「この大きな転換は時系列による作品史の展開としてあつかうよりも、むしろ挽歌の形成・享受の場の違い、としてあつかわれるべき」であると結論されている。

これらのことから、『万葉集』以外の文献を横断したかたちで、離別歌に通じる相聞的な発想が儀礼的挽歌へと質的な変換を遂げ、『古今集』以降の個人的な哀傷歌へ変貌したという「挽歌史」を描くことはできないと考える。それは『万葉集』に限った場合でも同様であり、「挽歌」とは直線的な発展史観にはなじまない問題を内包しているとみるべきだろう。

3　「挽歌詩」の作中主体

次に、前節を踏まえた上で、筆者自身の問題意識から『文選』の「挽歌」についてみておきたい。前記のように、『万葉集』において「挽歌」という部立がたてられたのは『文選』巻28の「挽歌」という項名に拠ったと考えられている。柩を乗せた車を挽きつつうたわれることから名付けられたといい、斉王田横の葬送の際にうたわれた「薤露」と「蒿里」の2首がはじめだとされている[10]。

しかし、『万葉集』と『文選』の「挽歌」の間にはいくつかの大きな相違点がある。漢詩と和歌の形態の違いは当然として、葬送と歌の関わり方が根本的に異なっている。つまり「挽歌」とは本来柩を挽く際の歌の意であるが、『万葉集』の「挽歌」はそのような性格を持たない。そしてもう一つの大きな違いは、『文選』の挽歌詩の作中主体は死者であるが『万葉集』ではそうした例がないという点である。もちろん実際に詩を作ったのは死者を送る生きた詩人であるのだが、次に示したように歌中の主体は送られる側である柩の中の死者だという体裁をとっている。

A　挽歌詩	繆熙伯
生時遊國都　死没弃中野	生時には国都に遊び、死没して中野に弃てらる。
朝發高堂上　暮宿黄泉下	朝に高堂の上を発し、暮に黄泉の下に宿す。
白日入虞淵　懸車息駟馬	白日は虞淵に入り、車を懸けて駟馬を息はしむ。
造化雖神明　安能復存我	造化は神明なりと雖も、安んぞ能く復た我を存せん。
形容稍歇滅　齒髪行當墮	形容稍歇滅せば、歯髪も行々當に墮つべし。
自古皆有然　誰能離此者	古より皆然る有り、誰か能く此より離るる者ぞ。

B　挽歌詩三首	陸士衡
卜擇考休貞　嘉命咸在茲	卜擇して休貞を考ふに、嘉命は咸茲に在り。

夙駕警徒御　結轡頓重基　　夙に駕して徒御を警め、轡を結びて重基に頓す。
龍慌被廣柳　前驅矯輕旗　　龍慌は廣柳を被ひ、前驅は軽旗を矯ぐ。
殯宮何嘈嘈　哀響沸中闈　　殯宮は何ぞ嘈嘈たる、哀響は中闈に沸く。
中闈且勿讙　聽我薤露詩　　中闈にて且く讙しくする勿かれ、我が薤露の詩を聴け。
死生各異倫　祖載當有時　　死生は各々倫を異にす、祖載は當に時有るべし。
舍爵兩楹位　啓殯進靈轜　　爵を両楹の位に舍き、殯を啓きて霊轜を進む。
飲餞觴莫舉　出宿歸無期　　飲餞するに觴を挙げること莫く、出宿すれば帰ること期無し。
帷衹曠遺影　棟宇與子辭　　帷衹には曠しく影を遺し、棟宇は子と辭す。
周親咸奔湊　友朋自遠來　　周親は咸奔湊し、友朋は遠きより来る。
翼翼飛輕軒　駸駸策素騏　　翼翼として軽軒を飛ばし、駸駸として素騏に策うつ。
按轡遵長薄　送子長夜臺　　轡を按じて長薄に遵ひ、子を長夜の臺に送る。
呼子子不聞　泣子子不知　　子を呼べども子は聞こえず、子に泣けども子は知らず。
歎息重櫬側　念我疇昔時　　重櫬の側に歎息し、我が疇昔の時を念ふ。
三秋猶足收　萬世安可思　　三秋も猶ほ收むるに足る、萬世は安んぞ思ふ可き。
殉沒身易亡　救子非所能　　没に殉じては身は亡ぼし易し、子を救ふは能ふる所に非ず。
含言言哽咽　揮涕涕流離　　言を含みて言は哽咽し、涕を揮うて涕流離たり。

流離親友思　惆悵神不泰　　流離として親友は思ひ、惆悵として神は泰からず。
素驂佇轜軒　玄駟驀飛蓋　　素驂は轜軒を佇ち、玄駟は飛蓋を驀す。
哀鳴興殯宮　迴遲悲野外　　哀鳴は殯宮に興り、迴遲して野外に悲しむ。
魂輿寂無響　但見冠與帶　　魂輿は寂として響無く、但だ冠と帶とを見るのみ。
備物象平生　長旌誰為旆　　物を備ふること平生に象たるも、長旌は誰が為にか旆する。
悲風徽行軌　傾雲結流藹　　悲風は行軌を徽め、傾雲は流藹に結ぶ。
振策指靈丘　駕言從此逝　　策を振げて霊丘を指し、駕して言に此より逝かん。

重阜何崔嵬　玄廬竄其間　　重阜は何ぞ崔嵬たる、玄廬は其の間に竄る。
旁薄立四極　穹隆放蒼天　　旁薄として四極を立て、穹隆として蒼天に放ふ。
側聽陰溝涌　臥觀天井懸　　側に陰溝の涌くを聴き、臥して天井の懸るを観る。
廣霄何寥廓　大暮安可晨　　廣霄は何ぞ寥廓たる、大暮は安んぞ晨く可き。
人往有反歲　我行無歸年　　人は往うて反る歳有れども、我は行いて帰る年無し。
昔居四民宅　今託萬鬼鄰　　昔は四民の宅に居り、今は萬鬼の鄰に託す。
昔為七尺軀　今成灰與塵　　昔は七尺の軀為り、今は灰と塵と成る。
金玉素所佩　鴻毛今不振　　金玉は素と佩ぶる所なりしも、鴻毛すら今は振らず。
豐肌饗螻蟻　妍姿永夷泯　　豊肌は螻蟻に饗し、妍姿は永く夷泯す。
壽堂延螭魅　虚無自相賓　　壽堂は螭魅を延き、虚無は自ら相賓す。
螻蟻爾何怨　螭魅我何親　　螻蟻よ爾は何をか怨む、螭魅よ我に何とて親しめる。
拊心痛荼毒　永歎莫為陳　　心を拊ちて荼毒を痛み、永歎して為に陳ぶる莫し。

C　挽歌詩　　陶淵明

荒草何茫茫　白楊亦蕭蕭　　荒草は何ぞ茫茫たる、白楊も亦蕭蕭たり。

嚴霜九月中　送我出遠郊	厳霜九月の中ごろ、我を送りて遠郊に出づ。
四面無人居　高墳正嶕嶢	四面には人居無く、高墳は正に嶕嶢たり。
馬為仰天鳴　風為自蕭條	馬は為に天を仰いで鳴き、風は為に自ら蕭條たり。
幽室一已閉　千年不復朝	幽室一たび已に閉ざせば、千年も復た朝あらず。
千年不復朝　賢達無柰何	千年も復た朝あらざるは、賢達も柰何ともする無し。
向來相送人　各已歸其家	向来相送りし人は、各々已に其の家に帰る。
親戚或餘悲　他人亦已歌	親戚は或ひは悲しみを餘し、他人も亦已に歌へり。
死去何所道　託體同山阿	死し去りては何の道ふ所かあらん、體を託して山阿に同じうす。

これらの詩においては、ことごとく死者が柩の中や墓の中からメッセージを発信している。

Aの詩では、全編が何人も死を超えることができないことへの慨嘆である。ことに傍線部では神の力をもってしても「我」（死者）を生き返らせることはできない、とうたう。そして姿形が次第に崩れ、歯や髪もやがて抜け落ち消えていく、とグロテスクなまでに死後の腐敗の様子が細かく描写されている。

Bの詩は、殯宮での葬儀の歌・出棺の歌・埋葬の歌の3首から成る。はじめの2首は第三者の立場から葬送の様子が細かに描かれているが、第3首において一転して「我」（死者）は死の世界から帰るときはない、と死者の側から詠まれていく。墓の中の様子も、天井の天象を眺め、永遠に続く夜の長さを嘆き、ここでも死後の身体が縮み、灰と塵になって、美しかった肌もケラやアリの餌となり朽ちていく様子を描き、一方で墓中に邪鬼や他の死者の魂が客としてやってくる様子を表現して嘆いている。

またCの詩では、柩を墓に収める様子が死者の視点から描写されている。もの寂しい風景が死者の情を象徴的に表し、死者を送る人々と「我」（死者）との対比や死後の悔しさ虚しさ、そして死者の気の遠くなるような時間への嘆きまで描かれている。

他方で、日本漢文の文献である『懐風藻』には「臨終詩」が1例あるだけである。

五言。臨終。一絶。	五言。臨終。一絶。
金烏臨西舍。鼓聲催短命。	金烏西舍に臨らひ、鼓聲短命を催す。
泉路無賓主。此夕離家向。	泉路賓主無し、此の夕家を離りて向かふ。　（『懐風藻』七）

黄泉路への不安は述べているが、これもまた生者の側からの描写であって、「挽歌詩」のような発想・描写とは一線を画す。

つまり、同じ漢文体とはいっても中国詩文をそのまま取り入れたのではなく、死者になり代わって詠むという「挽歌」は忌避された可能性があると考える。

4　『万葉集』における死者の歌

では、万葉集において「挽歌」と分類された中には、死者がうたう体裁を持つ歌があるのだろうか。結論から言えばない。せいぜい辞世歌かともいわれる有間皇子や柿本人麻呂の「自傷」の歌や、大津皇子の「被死之時」の歌がある程度である。

有間皇子自傷結松枝歌二首

磐白乃　濱松之枝乎　引結　真幸有者　亦還見武（2-141）
（いはしろの　はままつがえを　ひきむすび　まさきくあらば　またかへりみむ）

家有者　笥尓盛飯乎　草枕　旅尓之有者　椎之葉尓盛（2-142）
（いへにあれば　けにもるいひを　くさまくら　たびにしあれば　しひのはにもる）

柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時自傷作歌一首

鴨山之　磐根之巻有　吾乎鴨　不知等妹之　待乍将有（2-223）
（かもやまの　いはねしまける　われをかも　しらにといもが　まちつつあるらむ）

大津皇子被死之時磐余池陂流涕御作歌一首

百傳　磐余池尓　鳴鴨乎　今日耳見哉　雲隠去牟（3-416）

右藤原宮朱鳥元年冬十月

これらの臨終の歌に関して、中西進氏は次のように指摘する。

そもそも中国において臨終詩は臨刑詩であり、志半ばに処刑された人間の止むことのない述志がそれであった。この臨終詩の認定がわが国古代にも受けつがれたゆえに、異端の反逆者にばかり臨終歌があるのであろう。

たった一人処刑されたのでもないのに、臨終歌めいたもの（臨終歌ではない）を作ったのが漢文学に堪能であった山上憶良だということは面白い（『万葉集』巻六、九七八）。彼はその知識によって明瞭に「詩＝志」という図式をもっており、志空しく死んではならないという臨刑詩の常道も心得ていた。だから彼は有間皇子という刑死者の臨終歌に追和するのである（巻二、一四五）。

ただし、作中の主体ということでいえば、これらもやはり死後の人間ではなく生きた人間の詠んだ歌であることにかわりない。

万葉歌において、七夕歌に牽牛や織女になりきって詠まれた歌があり、行幸従駕歌といった儀礼歌には天皇や皇子になり代わって詠まれる歌が見られるが、少なくとも「挽歌」と分類された歌では、死者になり代わって詠まれることはない。このことは、死者に関する禁忌が古代の大陸文化と日本列島の文化では異なっていた可能性を示しているだろう。

ただ、歌中ではなく序文において死者になり代わってうたうということを表明した例も見出される（5-886～891）。この歌群は万葉集においては「挽歌」に分類されてはおらず、題詞・左注などにも明示されていない。しかし、本共同研究で、松田信彦氏の『日本書紀』『古事記』の基礎資料の提示を受けて行った、『万葉集』の死に関する語彙を検索する作業では拾いあげることができた。はじめに述べたとおりこれらを「挽歌」として処理することは避けねばならないが、そこに死に関係する歌という共通点は窺えるのであり、「挽歌」とされた歌の認識が逆照射される可能性があると考えて資料を掲出したものであった（末尾の【参考資料１】を参照）。それぞれの語彙を題詞・左注・歌から検索し、前掲の【資料１】のタイプ分けに基づきながら調べた結果、「挽歌」ではないが死に関わるとみられる例は12例であった（【参考資料２】）。そのうち１例に、死者になり代わって歌人が創作した作品の例が見出される。次にその全文を掲げておく。

敬和為熊凝述其志歌六首［并序］　　筑前國守山上憶良

大伴君熊凝者　肥後國益城郡人也　年十八歳　以天平三年六月十七日　為相撲使某國司官位姓名従人　参向京都　為天不幸在路獲疾　即於安藝國　佐伯郡高庭驛家身故也　臨終之時長歎息曰　傳聞　假合之身易滅　泡沫之命難駐　所以千聖已去　百賢不留　況乎凡愚微者何能逃避　但我老親並　在菴室　侍我過日　自有傷心之恨　望我違時　必致喪明之泣　哀哉我父　痛哉我母　不患一身向死之途　唯悲二親在生之苦　今日長別　何世得覲　乃作歌六首而死　其歌曰

宇知比佐受　宮弊能保留等　多羅知斯夜　波々何手波奈例　常斯良奴　國乃意久迦袁　百重山越弖須疑由伎　伊都斯可母　京師乎美武等　意母比都々　迦多良比遠礼騰　意乃何身志　伊多波斯計礼婆　玉桙乃　道乃久麻尾尓　久佐太袁利　志婆刀利志伎提　等許自母能　宇知許伊布志提意母比都々　奈宜伎布勢良久　國尓阿良婆　父刀利美麻之　家尓阿良婆　母刀利美麻志　世間波　迦久乃尾奈良志　伊奴時母能　道尓布斯弖夜　伊能知周疑南　［一云　和何余須疑奈牟］

（5-886）

多良知子能　波々何目美受提　意保々斯久　伊豆知武伎提可　阿我和可留良武　（5-887）

都祢斯良農　道乃長手袁　久礼々々等　伊可尓可由迦牟　可利弖波奈斯尓［一云　可例比波奈之

尓]　(5-888)

家尓阿利弖　波々何刀利美婆　奈具佐牟流　許々呂波阿良麻志　斯奈婆斯農等母　[一云　能知波志奴等母]　(5-889)

出弖由伎斯　日乎可俗閇都々　家布々々等　阿袁麻多周良武　知々波々良波母　[一云　波々我迦奈斯佐]　(5-890)

一世尓波　二遍美延農　知々波々袁　意伎弖夜奈何久　阿我和加礼南　[一云　相別南]　(5-891)

序文の傍線部において熊凝という人物の「死」が描写され、今まさに死のうとする熊凝の心情が歌群の主題となっていることが明示されている。しかし、題には熊凝になりかわってその「志」を述べると表明されているものの、序文と歌とでは生前の熊凝が臨終に際して残したことばであるという体裁をとる。その意味では、歌中の主体は生者なのである。

しかし、「志」を述べるという題詞そのものが、中国詩における刑死者の臨終詩を踏襲していることは間違いないといえるだろう。

同じ主題による作歌は、「大伴君熊凝歌二首〔大典麻田陽春作〕」(5-884、885)にも見える。序文こそないものの、題は「熊凝歌」としつつも麻田陽春の作であることが示されている。

こうした「挽歌」ではない例が、むしろ中国文学の「臨終詩」に近い表現の主題と発想を有しているということは、大きな問題をはらんでいる。

5　伝説歌はなぜ「挽歌」か

前節でみたように、「挽歌」という分類ではない歌に物語的な人物造形による死に関わる歌群がある。それと同時に、七夕歌のように伝説上の人物になりきっての叙情も成立している。その中間の存在として、「挽歌」に分類されているいわゆる伝説歌を捉えておく必要があるだろう。たとえば次のような歌である。

見菟原處女墓歌一首[并短歌]

葦屋之　菟名負處女之　八年兒之　片生之時従　小放尓　髪多久麻弖尓　並居　家尓毛不所見
虚木綿乃　牢而座在者　見而師香跡　悒憤時之　垣廬成　人之誂時　智弩壮士　宇奈比壮士乃
廬八燎　須酒師競　相結婚　為家類時者　焼大刀乃　手頴押祢利　白檀弓　靫取負而　入水　火
尓毛将入跡　立向　競時尓　吾妹子之　母尓語久　倭文手纏　賤吾之故　大夫之　荒争見者　雖
生　應合有哉　宍串呂　黄泉尓将待跡　隠沼乃　下延置而　打歎　妹之去者　血沼壮士　其夜夢
見　取次寸　追去祁礼婆　後有　菟原壮士伊　仰天　叫於良妣　跼地　牙喫建怒而　如己男尓
負而者不有跡　懸佩之　小劔取佩　冬蔀蕷都良　尋去祁礼婆　親族共　射歸集　永代尓　標将為
跡　遐代尓　語将継常　處女墓　中尓造置　壮士墓　此方彼方二　造置有　故縁聞而　雖不知
新喪之如毛　哭泣鶴鴨　(9-1809)

反歌

葦屋之　宇奈比處女之　奥槨乎　往来跡見者　哭耳之所泣　(9-1810)

墓上之　木枝靡有　如聞　陳努壮士尓之　依家良信母　(9-1811)

死者になりきって死後の世界の様子や心情を想像して言語化するという「挽歌詩」の方法は、伝説上の人物になりきって歌を詠むことと相通じる。ここでみられるように、物語中の第三者のように、人物の姿形や心情、そして会話まで再現するという体裁で想像され言語化されているからである。

このような作歌主体と作中主体とのずれは、六朝期を中心とした絵画詠でも頻繁に見出すことができる現象である。次にあげるように、画中の人物になりきって絵画に描かれた風景や出来事を表現し、

またその人物の心情を想像して我がこととして言語化する行為がなされている。

昨夜鳥聲春．驚啼動四鄰．今朝梅樹下．定有詠花人．
流星浮酒泛．粟鈿繞盃脣．何勞一片雨．喚作陽臺神．

逍遙遊桂苑．寂絶想桃源．狹石分花逕．長橋映水門．
管聲驚百鳥．人衣香一園．定知懽未足．横琴坐樹根．

高閣千尋起．長廊四注連．歌聲上扇月．舞影入聞絃．
澗水遶牕外．山花即眼前．但顧長歡樂．從今一百年．

（痺信「詠屏風詩」『藝文類聚』第六十九巻服飾部上屏風　より）

見楚有先王之廟及公卿祠堂，圖畫天地山川神靈，琦瑋児佹，及古賢聖怪物行事．周流罷倦，休息其下，仰見圖畫，因書其壁，何而問之，以渫憤懣，舒瀉愁思．楚人哀惜屈原，因共論述，故其文義不次序云爾．

（『楚辞』「天問」王逸注）

孟夏草木長，繞屋樹扶疎．衆鳥欣有託，吾亦愛吾廬．
既耕亦已種，時還讀我書．窮巷隔深轍，頗迴故人車．
歡言酌春酒，摘我園中蔬．微雨從東來，好風與之俱．
汎覽周王傳，流觀山海圖．俯仰終宇宙，不樂復何如．

（『文選』第三十巻詩己雑詩下／『陶淵明集』巻四「読山海経詩十三首」一）

翩翩三青鳥，毛色奇可憐．朝為王母使，暮帰三危山．
我欲因此鳥，具向王母言．在世無所須，唯酒與長年．

（『陶淵明集』巻四「読山海経詩十三首」五）

逍遙蕪皋上，杳然望扶木．洪柯百萬尋，森散覆暘谷．
靈人侍丹池，朝朝為日浴．神景一登天，何幽不見燭．

（『陶淵明集』巻四「読山海経詩十三首」六）

これらはその一例に過ぎないが、画中に自らを置き画中の人物になりきって風景や出来事を描写したり、心境を詠んだりすることが、一般に行われていた。このような絵画詠法の万葉歌への影響については、すでに東茂美氏や西地貴子氏が指摘している。(11)

六朝期には詩論と画論の近似も見られ、そのような思想的背景もあってこのような画中詠法が生まれた可能性がある。(12)

また、挽歌には直接関係しないが、次のような歌は絵画詠とみなしてよいだろう。

春二月諸大夫等集左少辨巨勢宿奈麻呂朝臣家宴歌一首
海原之　遠渡乎　遊士之　遊乎将見登　莫津左比曽来之（6-1016）

右一首書白紙懸著屋壁也　題云　蓬莱仙媛所化嚢蘰　為風流秀才之士矣　斯凡客不所望見哉

獻忍壁皇子歌一首[詠仙人形]
常之倍尓　夏冬往哉　裘　扇不放　山住人（9-1682）

このように作中主体という視点から考えてみると、いわゆる伝説歌が「挽歌」に分類された契機は、伝説上の人物の墓を詠むということだけではなかった可能性もある。

ただ、作歌主体とは異なる作中主体という発想と詠法は、「挽歌詩」のままの形では取り入れられなかったことは事実であり、そこに死への禁忌の相違を見ることができるだろう。記紀神代巻においてアジスキタカヒコネ神が穢れた死者であるアメワカヒコと間違われ、怒り狂う挿話があることから考えて、たとえ表現上のこととはいっても、死者になりかわることは古代の日本列島の文化において容認されることではなかったのであろうと思われる。それはまた、万葉歌において死者に会うための道や術を知らない（いたもすべなみ：3-456、13-3329、道の知らねば：13-3344、道知らませば：3-468、道の知らなく：2-158など）と表現することや、死者がどのように考えたのかわからない（いかさまに思ほしめせか：2-162、167、217、3-443、460、13-3326など）と表現することなど、「挽歌」に特徴的な表現が、生者と死者とを厳然と分かつことによって成り立っていることからも窺うことができる。

6　おわりに

以上、『文選』の「挽歌詩」との作中主体の相違を軸に、『万葉集』における「挽歌」の古代東アジアにおける文化的位置について考えてみた。「挽歌詩」では死者が作中主体であったが、「挽歌」という分類名を取り入れた『万葉集』においては、同様のことはまったく見られなかった。このことは「殯宮」や「挽歌」といった概念語を受け入れながらも、死への禁忌が異なっていたことを意味し、それによって文学も異なる様相を呈することになったと考えた。

また、そうした作中主体の表現方法の獲得は絵画詠法との接点を考えることで理解され、万葉歌の場合はそれが伝説歌や七夕歌として受け入れられたのであり、それによって「挽歌」としての伝説歌が生まれたのではないかと思われた。

なお、死者を作中主体とする「挽歌詩」の発想は、あるいは中国・韓半島の古墳壁画に墓主図があり生前の様子などが描かれている[(13)]こととともあわせて考えてみるべきかもしれない。筆者は絵画と文学との密接な関係もまた極めて東アジア的な問題として認識している[(14)]が、本稿の趣旨からは外れるので別稿を期したい。

※共同研究時に提示した『万葉集』の「挽歌」についての基礎資料の一部を、参考として以下に付す。

【参考資料１】①②③の数字は【資料１】のタイプ分けに基づく。いずれにも当てはまらない例のうち、人物の閲歴を示す場合・および表記上の問題である場合は▲、それ以外を●印とする。

＜誄＞　用例なし

＜殯＞

殯宮之時

①2-167題詞「日並皇子尊殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」

①2-169左注「或本以件歌為後皇子尊殯宮之時歌反也」

①2-196題詞「明日香皇女木蹶殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」

①2-199題詞「高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」

大殯之時

①2-151題詞「天皇大殯之時歌二首」

＜葬＞

①3-417題詞「河内王葬豊前國鏡山之時手持女王作歌三首」

①2-195左注「右或本曰　葬河嶋皇子越智野之時　獻泊瀬部皇女歌也　日本紀云」

①3-461左注「…依餌薬事　往有間温泉而不會此喪　但郎女獨留葬送屍柩既訖　仍作此歌」

移葬

①2-165題詞「移葬大津皇子屍於葛城二上山之時大来皇女哀傷御作歌二首」

①2-166左注「右一首今案不似移葬之歌　盖疑従伊勢神宮還京之時路上見花感傷哀咽作此歌」
火葬
①3-428題詞「土形娘子火葬泊瀬山時柿本朝臣人麻呂作歌一首」
①3-429題詞「溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌二首」
●17-3957歌割注「佐保山火葬　故謂之佐保乃宇知乃佐刀乎由吉須疑」
神葬
①2-199歌「…憶毛　未不盡者　言左敝久　百濟之原従　神葬　々伊座而…」
①13-3324歌「…朝裳吉　城於道従　角障經　石村乎見乍　神葬々奉者…」
＜喪＞
①3-461左注「依餌藥事　往有間温泉而不會此喪　但郎女獨留葬送屍柩既訖　仍作此歌」
●8-1472左注「石上朝臣堅魚遣大宰府弔喪并賜物也　其事既畢驛使及府諸卿大夫等共登」
●17-3959左注「右天平十八年秋九月廿五日　越中守大伴宿祢家持遥聞弟喪感傷作之也」
②19-4216左注「右大伴宿祢家持弔聟南右大臣家藤原二郎之喪慈母患也」
●5-886序文「在菴室　侍我過日　自有傷心之恨　望我違時　必致喪明之泣　哀哉我父」
①9-1809歌「造置有　故縁聞而　雖不知　新喪之如毛　哭泣鶴鴨」
も（仮名）
▲3-350歌「情悲喪」
▲3-459歌「悲喪有香」
①9-1801歌「見者悲喪」
①9-1806歌「情苦喪」
▲10-1907歌「止時喪哭」
＜崩＞
崩時（崩之時）
①2-150題詞「天皇崩時婦人作歌一首[姓氏未詳]」
①2-159題詞「天皇崩之時大后御作歌一首」
①2-160題詞「一書曰天皇崩之時太上天皇御製歌二首」
崩後（崩之後）
①2-149題詞「天皇崩後之時倭太后御作歌一首」
①2-162題詞「天皇崩之後八年九月九日奉為御齋會之夜夢裏習賜御歌一首」
＜薨＞
▲2-101題詞「……兼大将軍薨也」
①2-158左注「紀曰七年戊寅夏四月丁亥朔癸巳十市皇女卒然病發薨於宮中」
①2-193左注「右日本紀曰　三年己丑夏四月癸未朔乙未薨」
①2-195左注「朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑浄大参皇子川嶋薨」
①2-202左注「十年丙申秋七月辛丑朔庚戌後皇子尊薨」
薨時（薨之時）
①2-156題詞「十市皇女薨時高市皇子尊御作歌三首」
①2-204題詞「弓削皇子薨時置始東人作歌一首并短歌」
①2-230題詞「霊龜元年歳次乙卯秋九月志貴親王薨時作歌一首并短歌」
①3-454題詞「天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌六首」
①3-475題詞「十六年甲申春二月安積皇子薨之時内舎人大伴宿祢家持作歌六首」
薨後（薨之後）
①2-203題詞「但馬皇女薨後穂積皇子冬日雪落遥望御墓悲傷流涕御作歌一首」
①3-425左注「右二首者或云紀皇女薨後山前王代石田王作之也」
①2-163題詞「大津皇子薨之後大来皇女従伊勢齋宮上京之時御作歌二首」
▲4-528左注「右郎女者佐保大納言卿之女也　初嫁一品穂積皇子　被寵無儔而皇子薨之後時」
＜卒＞
①3-420題詞「石田王卒之時丹生王作歌一首并短歌」

①3-423題詞「同石田王卒之時山前王哀傷作歌一首」
●20-4477題詞「智努女王卒後圓方女王悲傷作歌一首」
①2-158左注「紀曰七年戊寅夏四月丁亥朔癸巳十市皇女卒然病發薨於宮中」
▲20-4331歌「…多家吉軍卒等…」
＜死＞
①2-207題詞「柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌二首并短歌」
①2-217題詞「吉備津采女死時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」
①2-220題詞「讃岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌」
①2-223題詞「柿本朝臣人麻呂在石見國臨死時自傷作歌一首」
①2-224題詞「柿本朝臣人麻呂死時妻依羅娘子作歌二首」
①3-415題詞「上宮聖德皇子出遊竹原井之時見龍田山死人悲傷御作歌一首」
①3-416題詞「大津皇子被死之時磐余池陂流涕御作歌一首」
①3-427題詞「田口廣麻呂死之時刑部垂麻呂作歌一首」
①3-429題詞「溺死出雲娘子火葬吉野時柿本朝臣人麻呂作歌二首」
①3-441題詞「神龜六年己巳左大臣長屋王賜死之後倉橋部女王作歌一首」
①3-443題詞「天平元年己巳攝津國班田史生丈部龍麻呂自經死之時判官大伴宿祢三中作歌」
①3-460題詞「七年乙亥大伴坂上郎女悲嘆尼理願死去作歌一首并短歌」
①3-481題詞「悲傷死妻高橋朝臣作歌一首并短歌」
①9-1800題詞「過足柄坂見死人作歌一首」
①9-1804題詞「哀弟死去作歌一首并短歌」
③15-3688題詞「到壹岐嶋雪連宅満忽遇鬼病死去之時作歌一首并短歌」
●16-3786題詞「昔物有娘子　字曰櫻兒也…方今壯子之意有難和平　不如妾死相害永息　尓乃尋入林中懸樹經死」
●19-4236題詞「悲傷死妻歌一首并短歌　作主未詳」
●5-886序文「…不患一身向死之途　唯悲二親在生之苦…乃作歌六首而死　其歌曰」
●5-897前・沈痾自哀文「…年十八歳而死其靈謂馮馬子曰…抱朴子曰人但不知其當死之日…死可畏也　天地之大德曰生故死人不及生鼠雖為王侯一日絶氣…」
●17-3973序文「昨日述短懐今朝汗耳目　更承賜書且奉不次　死罪々々　不遺下賤頻恵」
●13-3263左注「檢古事記曰　件歌者木梨之軽太子自死之時所作者也」
●16-3869左注「荒雄答曰　走雖異郡同船日久　志篤兄弟在於殉死　豈復辞哉」
●1-67歌「孤悲而死萬思」
●2-86歌「高山之　磐根四巻手　死奈麻死物呼」
●3-327歌「将死還生」
●3-349「生者　遂毛死　物尓有者　今生在間者　樂乎有名」
①3-460「…死云事尓　不免　物尓之有者　憑有之　人乃盡…」
●4-504「君家尓　吾住坂乃　家道乎毛　吾者不忘　命不死者」
●4-552「吾君者　和氣乎波死常　念可毛　相夜不相夜　二走良武」
●4-560「孤悲死牟　後者何為牟　生日之　為社妹乎　欲見為礼」
●4-581「生而有者　見巻毛不知　何如毛　将死与妹常　夢所見鶴」
●4-598「戀尓毛曽　人者死為　水無瀬河　下従吾痩　月日異」
●4-599「朝霧之　欝相見之　人故尓　命可死　戀渡鴨」
●4-603「念西　死為物尓　有麻世波　千遍曽吾者　死變益」
●4-605「天地之　神理　無者社　吾念君尓　不相死為目」
●4-683「謂言之　恐國曽　紅之　色莫出曽　念死友」
●4-684「今者吾波　将死与吾背　生十方　吾二可縁跡　言跡云莫苦荷」
●4-738「世間之　苦物尓　有家良之　戀尓不勝而　可死念者」
●4-739「後湍山　後毛将相常　念社　可死物乎　至今日毛生有」
●4-748「戀死六　其毛同曽　奈何為二　人目他言　辞痛吾将為」
●4-749「夢二谷　所見者社有　如此許　不所見有者　戀而死跡香」

●5-897「…死波不知　見乍阿礼婆　心波母延農　可尓可久尓　思和豆良比…」
●6-1028「右一首大伴坂上郎女作之也　但未逕奏而小獣死斃　因此獻歌停之」
●9-1740「二人入居而　耆不為　死不為而　永世尓　有家留物乎」
●9-1740「後遂　壽死祁流　水江之　浦嶋子之　家地見」
●9-1785「人跡成　事者難乎　和久良婆尓　成吾身者　死毛生毛」
●10-2254「秋芽子之　上尓置有　白露之　消鴨死猿　戀乍不有者」
●10-2256「秋穂乎　之努尓押靡　置露　消鴨死益　戀乍不有者」
●10-2258「秋芽子之　枝毛十尾尓　置霧之　消鼉死猿　戀乍不有者」
●10-2274「展轉　戀者死友　灼然　色庭不出　朝容皃之花」
●11-2355「恵得　吾念妹者　早裳死耶　雖生　吾邇應依　人云名國」
●11-2370「戀死　戀死耶　玉鉾　路行人　事告無」
●11-2377「何為　命継　吾妹　不戀前　死物」
●11-2390「戀為　死為物　有者　我身千遍　死反」
●11-2401「戀死　戀死哉　我妹　吾家門　過行」
●11-2434「荒磯越　外往波乃　外心　吾者不思　戀而死鞆」
●11-2498「剱刀　諸刃利　足踏　死々　公依」
●11-2544「寤者　相縁毛無　夢谷　間無見君　戀尓可死」
●11-2560「人毛無　古郷尓　有人乎　愍久也君之　戀尓令死」
●11-2570「如是耳　戀者可死　足乳根之　母毛告都　不止通為」
●11-2572「偽毛　似付曽為　何時従鹿　不見人戀尓　人之死為」
●11-2592「戀死　後何為　吾命　生日社　見幕欲為礼」
●11-2636「剱刀　諸刃之於荷　去觸而　所致鴨将死　戀管不有者」
●11-2676「久堅之　天飛雲尓　在而然　君相見　落日莫死」
●11-2700「玉蜻　石垣淵之　隠庭　伏雖死　汝名羽不謂」
●11-2718「高山之　石本瀧千　逝水之　音尓者不立　戀而雖死」
●11-2734「塩満者　水沫尓浮　細砂裳　吾者生鹿　戀者不死而」
●11-2764「為妹　壽遺在　苅薦之　思乱而　應死物乎」
●11-2765「吾妹子尓　戀乍不有者　苅薦之　思乱而　可死鬼乎」
●11-2784「隠庭　戀而死鞆　三苑原之　鶏冠草花乃　色二出目八方」
●11-2789「玉緒之　絶而有戀之　乱者　死巻耳其　又毛不相為而」
●12-2869「今者吾者　将死与吾妹　不相而　念渡者　安毛無」
●12-2873「里人毛　謂告我祢　縦咲也思　戀而毛将死　誰名将有哉」
●12-2883「外目毛　君之光儀乎　見而者社　吾戀山目　命不死者」
●12-2907「大夫之　聡神毛　今者無　戀之奴尓　吾者可死」
●12-2913「何時左右二　将生命曽　凡者　戀乍不有者　死上有」
●12-2928「各寺師　人死為良思　妹尓戀　日異羸沼　人丹不所知」
●12-2939「戀云者　薄事有　雖然　我者不忘　戀者死十万」
●12-2940「中々二　死者安六　出日之　入別不知　吾四九流四毛」
●12-3066「妹待跡　三笠乃山之　山菅之　不止八将戀　命不死者」
●12-3075「如此為而曽　人之死云　藤浪乃　直一目耳　見之人故尓」
●12-3080「海若之　奥尓生有　縄乗乃　名者曽不告　戀者雖死」
●12-3083「戀事　益今者　玉緒之　絶而乱而　可死所念」
●12-3105「人目太　直不相而　蓋雲　吾戀死者　誰名将有裳」
●12-3111「為便毛無　片戀乎為登　比日尓　吾可死者　夢所見哉」
●13-3263「檢古事記曰　件歌者木梨之軽太子自死之時所作者也」
①13-3344「行文将死跡　思友　道之不知者　獨居而　君尓戀尓」
●16-3786「昔物有娘子　字曰櫻兒也　于時有二壮子　共誂此娘而捐生捨競貪死相敵」
●16-3786「方今壮子之意有難和平　不如妾死相害永息　尓乃尋入林中懸樹經死」

●16-3792「死者木苑　相不見在目　生而在者　白髪子等丹　不生在目八方」

●16-3797「死藻生藻　同心迹　結而為　友八違　我藻将依」

●16-3811「将死命　尓波可尓成奴　今更　君可吾乎喚　足千根乃」

●16-3811「應死吾之故」

●16-3849「生死之　二海乎　猒見　潮干乃山乎　之努比鶴鴨」

●16-3852「鯨魚取　海哉死為流　山哉死為流　死許曽　海者潮干而　山者枯為礼」

●16-3869「荒雄答曰　走雖異郡同船日久　志篤兄弟在於殉死　豈復辞哉　津麻呂曰」

●16-3885「吾居時尓　佐男鹿乃　来立嘆久　頓尓　吾可死」

●18-4094「敝尓許曽死米　可敝里見波　勢自等許等太弖　大夫乃　伎欲吉彼名乎」

【参考資料２】

17-3957本文注「佐保山火葬　故謂之佐保乃宇知乃佐刀乎由吉須疑」

8-1472左注「石上朝臣堅魚遣大宰府弔喪并賜物也　其事既畢驛使及府諸卿大夫等共登」

17-3959左注「右天平十八年秋九月廿五日　越中守大伴宿祢家持遥聞弟喪感傷作之也」

5-886序文「在菴室　侍我過日　自有傷心之恨　望我違時　必致喪明之泣　哀哉我父」

20-4477題詞「智努女王卒後圓方女王悲傷作歌一首」

16-3786題詞「昔物有娘子　字曰櫻兒也…方今壮子之意有難和平　不如妾死相害永息　尓乃尋入林中懸樹縊死」

19-4236題詞「悲傷死妻歌一首并短歌　作主未詳」

5-886序文「…不患一身向死之途　唯悲二親在生之苦…乃作歌六首而死　其歌曰」

5-897前・沈痾自哀文「…年十八歳而死其霊謂馮馬子曰…抱朴子曰人但不知其當死之日…死可畏也　天地之大徳曰生故死人不及生鼠雖為王侯一日絶氣…」

17-3973序文「昨日述短懐今朝汗耳目　更承賜書且奉不次　死罪々々　不遺下賤頻恵」

13-3263左注「檢古事記曰　件歌者木梨之軽太子自死之時所作者也」

16-3869左注「荒雄答曰　走雖異郡同船日久　志篤兄弟在於殉死　豈復辞哉」

---

(1) 折口信夫「相聞歌概説」『短歌研究』7-1号・1938年、西郷信綱『詩の発生』（未来社）1960年

(2) 身崎壽『宮廷挽歌の世界』（塙書房）1994年9月

(3) 伊藤博「挽歌の世界」『国文学解釈と鑑賞』（至文堂）1970年7月号

(4) 尾崎富義「挽歌」の項目『上代文学研究事典』（おうふう）1996年5月

(5) 青木生子『萬葉挽歌論』（塙書房）1984年3月

(6) 注２に同じ

(7) 折口前掲論文

(8) 風巻景次郎「万葉集と歌風の変遷」『万葉集大成』1巻（平凡社）1953年、阿蘇瑞枝『柿本人麻呂論考』（桜楓社）1972年

(9) 上野誠『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼―』（雄山閣）1997年11月

(10) 新釈漢文大系『文選』

(11) 東茂美「洛神の女神―大伴旅人の美人詠―」『水辺の万葉集』笠間書院、1998年10月、「数む嗜癖―憶良の来去来Ⅱ―」「福岡女学院大学人文学研究所紀要人文学研究」創刊号・1998年3月、西地貴子「高橋虫麻呂の『河内の大橋を独り行く娘子を見る歌』―題画詠法からの学び―」『かほよとり』8号、2000年11月、など

(12) ・『詩品』（梁・鍾嶸）

晉黄門郎張協　文体は華浄にして，病累少なし。又巧みに形似の言を構う。

宋臨川太守謝靈運　雑うるに景陽の体有り，故に巧似を尚ぶ。（『宋書』謝霊運伝論には「形似」）

・『文心雕龍』（梁・劉勰）

歳に其の物有り，物に其の容有り．情は物を以て遷り，辭は情を以て發す．（巻十／第四十六物色）

・『歴代名画記』（唐・張彦遠）

古の画は、或は能く其の形似を移して其の骨気を尚ぶ。形似の外を以て其の画を求む、此俗人と道ふべきこと難きなり。今の画は、縦形似を得るも、而も気韻生ぜず。気韻を以て其の画を求むれば、則ち形似はその

間に在り。上古の画は、迹簡に意澹にして雅正なり。顧・陸の流是なり。中古の画は、細密精緻にして臻麗なり。展・鄭の流是なり。近代の画は、煥爛して備はんことを求め、今人の画は、錯乱して旨無し。衆工の迹是なり。夫物を象るは、必ず形似に在り。形似は須らく其の骨気を全くすへし。骨気・形似は、皆立意に本きて、而して用筆に帰す。故に画に工みなる者、多く書を善くす。

⑬ 斎藤忠『古墳文化と壁画』（雄山閣）1997年6月

⑭ 『世界の文学』110-マンガと文学（朝日新聞社）2001年9月